

内容紹介

岩手県内陸部の遠野市は、3・11の大震災時は釜石など海岸部の被災地に食料や物資を届ける一大拠点だった。福島原発から200キロ以上も離れたこの地に高レベルの放射能が飛来するとは思ひもしなかった。畜産農家に衝撃が走ったのは後日、2012年の2月以降のこと。総面積4880ヘクタールの大切な牧草地が使用禁止になった。農家の苦悩と、馬や牛の「放牧」の長い伝統をふまえつつ、5年がかりの汚染土の除染作業が続く現在進行形の「遠野物語」を紹介する。

初出

朝日新聞 二〇一二年十二月十一日～十二月二十五日

目 次

[第1章 広がっていく赤い点](#)

[第2章 土にしみこんだ](#)

[第3章 持ち寄られた粳米](#)

[第4章 会議はもう終わりだ](#)

[第5章 どうして飛んできた](#)

[第6章 びかびかの白長靴](#)

[第7章 おれたちが伝統継承](#)

[第8章 放牧があつてこそ](#)

[第9章 ゆきはるは飼えない](#)

[第10章 今は空つぽの牛舎](#)

[第11章 「牧草地すべて除染」](#)

[第12章 「グレーは黒なんだ」](#)

[第13章 生まれた土地の名で](#)

[第14章 安全な牛育てていく](#)

第1章 広がっていく赤い点

夏が始まる2011年7月ごろだった。岩手県遠野市に住む畜産農家の菊池昌茂（きくちまさしげ）（29）は、新しいスマートフォンをいじっていた。

原発事故直後の4月に買ったばかりだ。「福島第一原発」で検索すると、さまざまな映像が出てくる。見るのが怖い気もした。

原発の建屋内部の映像を探していたとき、おや、と思った。奇妙な映像があったのだ。

画面には「第一原発上空でホコリをばらまくと」とある。

誰が投稿したのかは分からない。当時の風向きを検証し、放射能が拡散していった道筋を再現していた。「ホコリ」の着地点は、風船のような小さな赤い点で示されている。

事故直後の「ホコリ」は、まず太平洋に。続いて原発の北西方向へ。3月12日、13日、14日、15日、16日……。はけで掃いたように、汚染の跡が画面に残っていく。

「すげえな」

波打つように、ざざっ、ざざっ、と赤い点が広がっていく。気づくとそれは遠野にまで届いていた。

「これって……。危なくね？」

遠野は福島第一原発から、仙台をはさんで200キロ以上も北にある。にもかかわらず、菊池の中で懸念が芽生えた。

その1カ月以上前の5月13日、遠野からさらに50キロも北に位置する滝沢村の県畜産研究所で、牧草から1キロ当たり359ベクレルの放射性セシウムが検出されていた。

当時の牧草の安全基準値は重さ1キロ当たり300ベクレル。福島県よりも北の牧草で、初めて基準値を超えるセシウムが検出されたのだ。

岩手県は周辺自治体に放牧自粛要請を出し、サンプル調査をした。その結果、対象になった11市町村すべてで基準を下回り、放牧自粛は解除された。遠野市もその一つだった。

菊池は雌牛を飼って子牛を産ませる繁殖農家だ。当時で60頭の雌牛を持っていた。牧草の汚染は経営の根幹にかかわる。一安心はしたが、一抹の不安はあった。

5月下旬から6月、菊池ら農家は採草地で草刈りをした。素手で、マスクもつけなかった。

「もしかして、おれら放射能吸い込んでんじゃねえか？」

懸念が表面化したのは、その直後だった。

第2章 土にしみこんだ

2012年2月、遠野市の畜産農家、菊池昌茂は信じられない通告を受けた。牧場が使えないというのだ。いい子牛が生まれるのは、広大な公共牧場でたつぷりと牧草を食べさせ、運動をさせるからこそだ。菊池は規模を拡大し、60頭の雌牛を飼っている。牧場が使えなくなるなんて、考えたこともなかった。

菊池だけではない。遠野全体に衝撃が走った。

原因は放射能だった。2月3日、国が牛の飼料の基準を1キロあたり300ベクレルから100ベクレルに厳しくした。それに牧草のほとんどが引っかかった。

11年6月中旬、県は遠野の公共牧場の牧草を検査した。基準値は1キロあたり300ベクレルで、結果はほとんどが基準値以下。1カ所で基準値を超えたものの大きな混乱はなかった。

牧場を利用する農家の大多数は菊池のような繁殖農家。子牛の場合、体内にセシウムがあつたとしても、肥育農家が育てているうちに代謝で体外に出てしまう。

半面、放射能が一带をうつつら覆っていることも明らかになった。公共牧場と農家の牧草地の総面積は4880ヘクタール。その87%、4260ヘクタールの牧草が100ベクレルを超えていた。

牧草が生えたのは、原発事故のあとだった。ということは、草に直接放射能が付いたのではない。土にしみこんで、生える草を汚染していると思われた。土をどうにかしないかぎり解決しない、ということだ。

2月に国の安全基準が100ベクレルになったとき、遠野市が考えたのは土の汚染を除くことであり、その間の放牧禁止だった。

2月21日。遠野市は、市畜産振興公社が管理する7公共牧場すべてでの牛の放牧禁止を決めた。

28日、菊池は説明会に参加した。

「放牧できなかつたら堆肥（たいひ）がたまる」「敷きわらが足りない」「いつから放牧できるんだ」

2時間の説明会では、多くの質問が飛んだ。しかし菊池の頭は、餌のことでいっぱいだった。

所有の60頭のうち30頭を放牧し、うち10頭は放牧地で越冬させてきた。放牧できないとなると、最大の問題は餌だ。餌がなければ牛は死ぬ。JAが代替飼料を配るという説明だったが、どうなるのか。

4月26日、4880ヘクタールすべてを5年かけて除染する方針が発表された。5月中旬にはその説明会。放射能に振り回される「放牧禁止元年」が始まった。

第3章 持ち寄られた粳米

3月11日の震災直後、遠野市では放射能など意識に上らなかった。心配したのは地震と津波だった。

強烈な揺れで、遠野市役所の中央館は壊れた。町にも被害が出た。

山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市……。津波被害を受けた沿岸部はすべて遠野の50キロ圏内だ。

しかし状況が分からない。

日付が変わった12日の深夜午前1時40分、大槌町から釜石の男性が助けを求めてきた。車で真っ暗な峠を二つ越えてきたという。「あっちでは食べるものも着るものもない。助けてくれ」。沿岸部からの最初の情報だった。

全域の停電で情報がなかった。男性の話にみんなが聴き入った。

「釜石のあの辺りは壊滅した、あそこもだめだ……」

「様子を見に行ってくれ」。市長の本田敏秋（ほんだとしあき）（65）が決断し、消防職員が出発した。午前4時50分、まだ暗い。道路はどこが崩壊しているか分からない。毛布と乾パン、灯油のポリタンクを車に積んで大槌高校を目指した。

消防職員が帰ってきた。デジカメの画面に写った大槌の町は想像を超えていた。どこが道路でどこが宅地なのか分からない。町は流されていた。

「避難所がいくつあるか、何人避難しているか分かんね。何人生きているかも分かんね」

釜石や大槌に親戚のいる人たちから叫び声が上がった。

遠野は岩手の内陸と沿岸部をつなぐ街道沿いに位置している。釜石に製鉄所ができてからは人や物の行き来がさらに盛んになる。釜石に親類のいない人はないといっていいほど、沿岸部との縁は深い。

遠野は米を作っている家が多いうえ、１９８１年の水害や９３年の冷害を経験した。そのため多くの家が粳米（もみごめ）のまま１年分を蓄えている。市役所が呼びかける前から、自分たちの地震の被害もそっちのけで、市民が次々と「どっか持って行くところないか」と米を持ってきた。

停電の中、発動機で動く精米機を見つけて粳を取り、市民センターや公民館のガス炊飯器で米を炊いた。主婦が総出でおにぎりを握った。遠野は後方支援の拠点になった。

市長の本田という。

「県や国からの指示を待たずに支援を始めました。余震も続いていて、物資を運ぶ職員たちに何かあったら、自分は職にはとどめれないと思った」

第4章 会議はもう終わりだ

震災2日後の3月13日、遠野市畜産振興課の佐々木洋（ささきひろし）（43）はトラックで釜石を目指した。牧草運搬用の4トントラックに、おにぎりや毛布を積んでいる。県境の峠道は、地震で崩れたり、凍結したりしていた。それを迂回（うかい）して間道を走った。狭い道では、サイドミラーを畳んで通った。通常は1時間程度のところが3時間かかった。

沿岸部に入ると、路上駐車が目立った。何でこんな場所に、と思ったが、それは津波で流されて壊れた車だった。救助隊が通れるよう、道路脇にどかされていたのだ。

佐々木は釜石、山田、大槌を担当し、ほぼ毎日、朝6時に出勤して食料を運び、戻ってまた運んだ。がれきをどかさず自衛隊員や警察官が1カ所に集まっていると、遺体が見つかったんだと分かる。遺体が目に入らないよう、道路だけを見据えて走った。

大槌町の公民館に向かっているとき、車のエアコンの温風が冷風が変わった。窓を開けると外の方が暑い。山火事の熱だった。

出発するとき、これはおめえ用だ、と消火器を渡されていた。「いざというとき、これで火と戦おうなんて思うなよ。トラックから離れる。自分の体についた火を消すための消火器だ」

トラックには、援助の軽油やガソリン2千リットルを積んでいた。遠野に届ければ被災地に確実に届く——。そんなうわさが広まった。全国の自治体から直接、県を飛び越えて遠野に救援物資が届くようになる。外務省経由で、インドネシアやフィリピンからも物資が届いた。

震災から5日目だった。内閣府から連絡があった。「名古屋でおにぎりを1万個確保したので、今から送る」おにぎりが届いたのは、午後8時から開いていた対策会議の最中だった。賞味期限は翌朝の4時となっている。「もう持って行けないな」と話していると市長の本田敏秋が怒った。「ここで捨てるということがどういことだか分かるか。被災地では1個を分けあってたんだ。今すぐ持っていけ。今夜中には届けられる。会議はもう終わりだ」

会議出席者の部長たちが4班に分かれ、届けに出発した。遠野の人たちが握り、被災地に運んだおにぎりは14万個に上った。放射能が迫っているなんて、人々の考えの外だった。

第5章 どうして飛んできた

遠野の畜産農家、菊池昌茂は「どうやって岩手まで、福島放射能が飛んできたんだ」と思う。第一原発から遠野までは200キロ以上もある。

国立環境研究所の地域環境研究センター長、大原利真（おおはらとしまさ）（58）は「シミュレーションした結果、遠野に放射能が降ったのは3月20日だと考えられます」といった。

震災後、大原はただちに、放射性物質の拡散状況を知ろうとした。だが、茨城県つくば市にある研究所は被災して停電し、パソコンも壊れた。

研究所が復旧するのを待って4月上旬、さっそく放射性物質拡散の予測に取り組んだ。

しかしこの時点ではまだ、事故でどのくらいの放射性物質が放出されたのか分からない。

これまで使っていた大気汚染用の計算プログラムを利用することを考えた。原発事故後の風向きや降雨などの気象や地形のデータを準備した。

4月中旬、やっと放射性物質の放出量が分かった。原子力安全委員会が発表したのだと知り合いの研究者から知らされた。3月11日から29日に放出された量を、プログラムに入力してみた。

11日、放射能が漏れ始めたときは西高東低の冬型の気圧配置がまだ強く、太平洋側に風は吹いていた。

3月15日から29日までの間、低気圧は2度、福島付近を通過した。

1回目の低気圧通過は15、16日だった。

15日午前、北風で放射性物質は南、首都圏の方へ流れた。午後には南東よりの風に変わり、放射性物質を含んだ大気塊は内陸部へ向かう。西側の山にぶつかって雨や雪が降り、放射性物質は地面に落ちた。

原発北西部や北関東近辺が汚染されたのはこのときだ。

次の低気圧は20、21日にやって来た。

20日昼から南風が吹く。放射性物質は北に運ばれ、北側の山にぶつかって雨や雪と一緒に落ちた。宮城北部、岩手南部、山形が汚染されたのはこのときだ。

大気は岩手では北上山地にぶつかる。早池峰山のふもとの遠野一帯には雪が降った。その雪の中に、放射性物質が含まれていたのだ。

菊池はいう。

「200キロ以上も離れてても来るんだな。もっと遠くで出たという話も聞くものな」

第6章　びかびかの白長靴

遠野の畜産農家、菊池昌茂は2002年3月、盛岡農業高校の畜産科を卒業した。そのときにはすでに、畜産で身を立てようという気持ちをしっかり持っていた。

卒業の1週間後にはカナダの牧場に視察に行った。頭数が多い牧場での飼い方、病気への対策などを見ておこうと思ったからだ。牧場は知り合いのつてをたどって探した。

就労ビザを取っていなかったため、3カ月でいったん遠野に帰る。コンビニで半年間アルバイトをして旅費30万円をため、ビザを取り、再びカナダに渡る。こんどは10カ月間働いた。帰国すると、さらに福岡の牧場で6カ月間働いた。

家は代々、馬を飼ってきた。父の菊池茂勝（きくちしげかつ）（63）は、買ったときより高い値段で売れば良いという昔風のやり方だった。

馬はそれでいいかもしれないが、牛は違う、と昌茂は考えた。

まず、血統が値段を決める。ヘルシー志向が強い時代だ。どんな血筋の和牛をいくらで買って、いくらで売なのか。かかった経費をどう償却するか。新しい飼育や経営を考えようとした。

畜産以外の同世代の農家とも積極的に付き合った。彼らはみんな設備投資に力を入れ、合理的な農業を目指していた。

10年4月に207平方メートルの牛舎を建てた。1・2メートル間隔で仕切り、繁殖牛21頭を入れた。機械が入れられるよう、牛舎の段差をなくした。自動給水機も導入した。

昌茂の仕事着はさっぱりしたポロシャツにジーンズだ。

長靴は白。びかびかに洗い上げてある。汚れたらはき替えられるよう、3足は用意している。

「よれよれのつなぎに汚い長靴じゃ、悲しいです。子どもたちが農業しようって思わないでしょ」

子どもたちがあこがれる職業に、農業が挙げられないのが悔しかった。

きつい汚い危険の3K、疲れる、もうからない……。そんなイメージを変えたかった。自分自身、仲間が増えなければつまらない。

自分の牛舎を持って半年後、地元の中学校で話をした。

——トラクターは外国製のでっけえのを動かしたい。

——命を育てる仕事だ。やりがいがある。外側も中身も、カッコいい農家になりたい。

20頭だった繁殖牛をどんどん増やした。繁殖牛が60頭になったとき、震災が起きた。

第7章 おれたちが伝統継承

畜産農家の菊池昌茂の家は代々、馬産をなりわいとしてきた。

父、茂勝は、今でも馬を飼う。繁殖、食肉、乗馬用として35頭。かつては山仕事にも馬を使った。乗馬用の馬は流鏝馬（やぶさめ）に出す。

遠野の牧畜は、もともとは馬だった。千年前の奥州藤原氏の時代には、すでに馬産が有名だった。遠野の北にある標高1917メートルの早池峰（はやちね）山の高原が、優良な牧草地としての条件を備えていた。

藤原氏が滅びると、甲斐（かい）にゆかりのあった南部氏が統治するようになる。

南部氏は、甲斐から甲斐駒を持ち込んだ。その甲斐駒に地元の馬や八戸一帯の陸奥馬をかけ合わせ、新しい馬をつくった。丈夫で従順な南部駒。それが遠野の馬になった。

馬はよく働いた。

戦に行き、田畑を耕し、材木も運んだ。人々は馬を愛した。一軒の家の中に、人と馬と一緒にすんだ。それが南部曲がり家と呼ばれる江戸時代の農家だ。

人々は暗いうちに起きて馬を世話し、農作業に使い、ふんは肥料にした。馬が死んでも、肉を食べたりしなかった。大事に埋葬した。

明治に入ると、品種改良で馬の大型化が進む。純粋な南部駒の血統を継いだ最後の名馬といわれた「盛（さかり）」号は、明治37年に死んだ。

しかし、トロッター種やアングロノルマン種など海外の品種を導入して、それ以降も馬産は続く。

昭和に入ると、また軍馬としての需要が高まった。

今は乳牛農家になっている佐々木俊一（ささきしゅんいち）（81）はいう。

「日中戦争になって、軍馬がたくさん要ったの。子馬が当時の金で800円で売れた。うんと喜んでね。農家はお金を使うことがなかったから。今年はいがった、10人家族が1年間暮らせるって」

当時の小学校の先生の初任給は月50円程度だった。

遠野には馬ゆかりの行事が残る。6月には輓馬（ばんば）レース。夏から秋には流鏑馬。

茂勝は南部流鏑馬会の副会長でもある。馬を調教し、練習して盛岡八幡宮に流鏑馬を奉納しに行く。

「おれたちが南部の伝統を継承してるのさ」

その馬の生産方法が、放牧だった。夏を山で過ごし、冬に家に戻ってくる「夏山冬里」方式。農繁期に馬は山にいるので、餌などの手はかからない。

第8章 放牧があつてこそ

遠野の畜産農家、菊池昌茂の父、茂勝はいう。

「牛や馬がひづめの下に熱が来て歩けなくなつても、2カ月も放牧させると治るんだ。ひづめが抜けたりしたやつでも治る。放牧で病気を治したのが何頭もいる」

早池峰山周辺の高原が遠野市の公共牧場だ。遠野の半分をぐるり囲むように、全部で7カ所ある。

放牧に連れて行くことを「山に上げる」、小屋に連れ帰ることを「山から下げる」という。

新しく草が生えた5月末から、雪が降り始める前の11月末までが放牧シーズン。1日1頭につき牛170円、馬220円を市畜産振興公社に払って、農家は「山に上げる」。

放牧されている間、牛や馬たちはずっと外にいる。もともと群れで生きる動物なので、寄り集まって暮らす。食べたいときに好きなだけ草を食べ、広い牧場を右に走ったり左に戻ったり。自由に運動し、ストレスなく過ごす。

2、3カ月放牧すると、新鮮な草を食べ、運動して、内臓はすばらしく丈夫になる。放牧地は標高が高いので、どんなに暑い時でも朝露が降る。その露でひざ下が洗われ、脚が強くなる。健康に育ち、受胎率が上がり、いい子を産む。

妊娠期間中も、出産予定日の1カ月前まで放牧する。出産後、たとえ1カ月でも余裕があればまた山に上げる人もいる。それほど放牧は体にいい。

毎日大量に出る糞尿（ふんにょう）の処理も、放牧期間中はしなくてよい。餌の心配もいらない。手間を取られないので、兼業農家でも、老夫婦しかいない農家でも、牛馬を飼い続けることができる。

遠野の繁殖牛の平均頭数は1軒あたり5～6頭。それが産む子牛は遠野全体で年間2千頭にもなる。健康に育っているため評判がいい。

そうした子牛が他地域に売られ、前沢牛や米沢牛といったブランド牛に育つ。東北だけでなく岐阜や埼玉、近江、松阪、九州にまで渡り、肥育農家に育てられて良質の肉になってきた。

公共牧場の一つ、荒川高原牧場の放牧風景は、2008年3月に文化庁の重要文化的景観に選ばれた。

その放牧が中止となった。

12年、放牧地には乗用馬がわずかにいただけだ。あちこちで除染が始まっており、黒い土がむき出しになっている。霧が立ちこめる草原は静まりかえっていた。

第9章 ゆきはるは飼えない

放牧の禁止は遠野の農家を揺るがした。牛の飼育をあきらめる動きもある。

57歳から畜産に本気になった遠野市の佐々木実（ささきみのる）（62）は、手塩にかけて育てた雌の黒毛和牛「ゆきはる」を手放すことにした。

佐々木は農家出身ではない。バスの運転手をしていたが、妻の実家が農家だった。

妻の家では短角種の和牛を3頭飼っていた。短角牛は赤毛で赤身の多い牛。霜降り肉が珍重されるようになり、黒毛和牛に変えた。

目のけがでバス会社を早期退職した佐々木は、野菜と畜産の農業に専心することにした。

血統を調べ、実際に見に行って牛を選んだ。一目で気に入ったのが「ゆきはる」だった。

「この牛はおれが買う。絶対にセリには出さないでくれ」

繁殖農家と直取引で手に入れた。2006年4月の生まれで、生後10カ月で佐々木のもとにやってきた。

ゆきはるは、初子を産んだ。雌で、売らずに残した。

「おれがほしくて買った大事な牛の子ども第1号なもの」

その2頭で繁殖に取り組む。11年は2頭を放牧し、子を産ませた。

それが、12年は放牧できない。自宅の向かいにある牛舎で飼う。

「夏はハエがいっぱい、くさくてなんねかった」

牛の糞尿（ふん）は完熟させないと虫がつく。出荷用の野菜畑にはとても使えない。ひとまず、自家用米の田んぼに積んだ。

佐々木はカボチャやトマト、ルッコラを出荷している。夏の農繁期に、12年は牛の世話が重なった。1日も家から離れられなくなった。

9月、JAいわて花巻で繁殖牛の品評会があった。6歳以上の部に、地区代表としてゆきはるを出した。

忙しい最中だったが、地域の推薦をもらった以上あとにひけない。2週間前から何度も洗い、ひづめを切り、バリカンで毛を刈った。

ゆきはるは1等賞を取った。

その直後、佐々木はゆきはるを手放すことにした。これ以上、世話するのは無理だった。

JAいわて花巻によると、佐々木が住む土淵地区で、10年度初めには124軒が牛を飼っていた。震災をへて、28軒が牛をやめた。

ゆきはるは同じ土淵の農家にもらわれていくことになった。

「農閑期になったら、寂しくなるかもな」

第10章 今は空っぽの牛舎

遠野市附馬牛（つきもうし）地区の井手政人（いでまさと）（80）、秀子（ひでこ）（75）夫婦も、2012年5月で最後の牛を手放した。高齢で運転できず、先が見えない中、飼育はむずかしい。

政人は父を2歳で亡くし、祖父の家で育った。おじ夫婦やいこと一緒だった。祖父の家には雄の馬1頭と、雌馬が3頭、ホルスタインが1頭いた。雌馬は放牧し、生まれた子を2歳まで育てて売った。雄馬は山や畑で使った。

1953年に秀子と結婚する。10年後、近くに家を建てて独立した。最初は短角和牛を、5年後には黒毛和牛に切り替えて2頭飼った。

子牛をセリに出す前夜、湯を沸かし、子牛を自分たち用のシャンプーで洗った。毛がふわふわになった。

セリ市場には母牛と一緒に連れて行った。母牛はセリには出さないが、子牛が母親と一緒にないと一歩も歩こうとしなかったからだ。

夫婦で牛の飼い葉と自分たちの弁当を背負い、朝暗いうちに家を出た。5キロの砂利道を2時間以上かけて歩いた。

「牛が糞（ふん）してもね、知らねえふりして歩いていくの」と秀子という。市場で周りの人が「まっこの牛はえらい毛並みいいぞ」とささやき合うのを聞いて、うれしかったのを覚えている。まっことは政人のことだ。

牛に冬は湯を飲ませた。氷点下になる夜、凍ってしまうからだ。一斗釜でバケツ2、3杯分を沸かし、ひしゃくで水おけに移した。

子牛が生後7カ月になると、くず豆や大根の葉を煮て食べさせた。お湯につけたタオルで体をふき、かゆそうなところを金ぐしでかいてやった。政人はいう。

「若い衆がもてたくておしゃれする。おんなじ思いでベコさ磨いて」

11年、生まれた牛は2頭。12年3月16日のセリで、289キロに育った1頭は51万6600円で売れ、茨城に行った。もう1頭は5月のセリで、遠野の肥育牧場に売れた。47万6700円だった。

政人はそのセリの前に、親の2頭を地区の農家に譲った。もう持ちきれなかった。

JAから飼料が届く間は飼えるかもしれないが、いつまで続くか。来春、草が生えたらまた放射能検査が行われる。その結果がどうなるか、だれも分らない。

これまでの人生、牛舎には必ず牛がいた。それが今は空っぽだ。政人は午前と午後に2時間ずつ散歩で時間をつぶす。

第11章 「牧草地すべて除染」

遠野の菊池昌茂は動じなかった。畜産をあきらめる気はまったくなかった。菊池の宮守地区でも、繁殖農家92軒のうち、やめる決断をしたのは高齢農家など7軒だけだった。

しかし、問題は餌だ。

遠野の畜産にとって食品の放射性物質の基準変更はこたえた。それにあわせ国は2月、いきなり牧草の基準値を1キロ当たり300ベクレルから100ベクレルに引き下げると通知してきた。

菊池の頭の中を占めていたのは、放牧できない間の餌のことだった。

県のサンプル調査では、牧草地4880ヘクタールの87%が100ベクレルを超えている。除染をして線量が下がるまでは使えない。

市畜産振興課の課長、菊池清春（きくちきよはる）（53）らが対策に取り組んだ。

当面、農家をどう支えるか。代わりの餌は……。そもそも、「100ベクレル以下」とされた13%の牧草地は何もしなくていいのだろうか。

県に問い合わせた。しかし当時の県は「除染対象は100ベクレル超です」と、国の基準を繰り返すだけ。にも知恵を出してはくれなかった。

100ベクレル以下の牧草地に安全証明を出してくれ、と県に頼んだ。しかし「出せません」の一言だった。

放射能の汚染はまだら状だ。調査地点から10メートルずれただけで数値が違う。それでは、除染しなかったところはグレーな印象となる。

食品をつくる産業にとって、安全安心は絶対だ。消費者に向かって「遠野全域が完全に安全です」といえなければだめなのだ。グレーでは黒と同じだ。

もし基準値以下の13%の牧草地を使った農家の牛から放射能が出たらどうすればいいだろう。被害者の農家が、加害者になってしまう。

基準変更の通知から3日で案をまとめ、市長の本田敏秋にいった。

「100ベクレル以下も含め、すべての牧草地を除染させてください」

本田は「よし、やれ」だった。

基準を下回る場所について除染したら、それは市の責任になる。費用はどう工面するか。補正予算のタイミングは過ぎている。

しかし、苦しんでいる農家に「少し待ってくれ」なんていえない。「除染が出来る出来ないじゃない。まずやるんだ」

3月26日、トラクターの購入など、除染と堆肥（たいひ）処理に必要な予算9600万円を決めた。餌はJAが乾牧草を購入して代替飼料として農家に配ることになった。

第12章 「グレーは黒なんだ」

2月末に行われた遠野市の説明会で、放射能対策の代替飼料としてJ Aが乾牧草を手配すると聞いた。しかし、畜産農家の菊池昌茂はすぐには信じられなかった。

牛は1頭で1日8～10キロの牧草を食う。自分の牛舎だけで60頭。遠野全体となれば一体、何トン必要になるのか。そんなに用意できるのか。

多分、むりだろう。だとしたら自分の分は自分で確保するしかない。大型トラックを借りて、北海道に買い付けに行こう。仲間と共同でならなんとかできるだろう――。

だが2週間後、菊池は「やるな」と思った。J Aが2トントラックで6往復し、4月分となる10トンの乾牧草を運んできたのだ。

J Aは乾牧草をまずアメリカから輸入した。青森の八戸港が復旧してからは、北海道からも買い付けた。一軒一軒に配る量は、農家が持つ採草地の面積で決めた。

ほかの農家から採草地を借りている人もいる。「自分の土地の分だけじゃ足りない」と声が上がった。その場合は、借用していることが分かる資料を出してもらうことにした。

「うちの草地は100ヘクタール以下だから、除染せずに使い続けてもいいんじゃないか」と訴える農家もいた。市畜産振興課の菊池清春らは「食べものつくってるんだから、信頼ないと売れねえ」と説得した。

「消費者にとっては、グレーは黒なんだ」

全部リセットするんだ、将来につけを残したらダメなんだ――。

それとは別に、放牧シーズン中の分は、過去3年の放牧数の実績から計算することにした。

しかし菊池昌茂の牛舎では、すでに代替飼料が足りなくなっている。

刈り取った牧草は少し干し、ロール状にラップで巻いておく。中で水分が50～60%に保たれ、発酵する。しかし乾牧草は水分がないので、牛が満腹するには量が足りない。仕方ないのでわらなどを加えている。

J Aが遠野分の乾牧草として、東京電力に費用を請求したのは、3月から6月に購入した2288トンについて。1億5259万円かった。仮払いとして半額は支払われたが、残りはまだだ。

代替飼料、除染、堆肥（たいひ）処理などの費用はざっと320億円と見積もられている。この地で食料生産が出来なくなったら、仕事はない。

農家から土を奪わないでくれ。遠野の人たちが東電に伝えたいのはそのことだ。

第13章 生まれた土地の名で

放牧禁止、餌の不足、除染……。マイナス材料ばかりと見える遠野だが、若手畜産農家、菊池昌茂の表情は明るい。

「去年の自分だったらつぶれていたと思う。でも、いまは夢が持てるから」

夢は、大手スーパーが入ってきてから広がった。

4年前、イトーヨーカ堂の水本忠士（みずもとただし）（57）が遠野を訪れた。食肉部門の責任者だ。水本は産地を巡り、5年に一度の「和牛のオリンピック」に行く中で、あることに気づいた。

有名なブランド牛や自分がおいしいと感じた牛肉、その牛の生まれをたどると、岩手産にぶつかるのだ。

水本は、遠野で市長の本田敏秋と会った。

「遠野のきれいな空気と水で育った子牛が、売られて別ブランドになってしまうのではもったいない。肥育までここでやりましょう」

それから3年。30回以上打ち合わせし、遠野で生まれた牛を遠野で育てるシステムができる。

2012年5月、食肉大手エスフーズ系の「遠野牧場」がオープンした。肥育牧場だ。遠野の繁殖農家が育てた子牛を引き受け、遠野牧場が肥育する。肉はヨーカ堂に納める。

ブランド名は「いわて遠野牛」。ヨーカ堂の「顔が見える食品。」シリーズの一つとして売り出すことが決まった。遠野の子牛たちが初めて、生まれた土地の名前で売られることになった。

11年2月22日には市長の本田が上京し、ヨーク堂社長と最終打ち合わせをした。春、3者連携の協定を結ぶことになった。その寸前に震災が起きた。

だが、協定は半年後、約束通りに締結された。

遠野牧場では、餌に徹底した検査をする。水質の検査は当然。いつどんな餌を与えたか、記録を毎日つける。病気になったとき与えた薬も報告する。水本は「安全の面からいったら、放射能だけが問題ではないのです」という。

原発事故後は土壌の放射性物質の検査も加えた。遠野だけではなく、全国どこでも同じレベルの検査をする。加工して店頭に並ぶ前にも放射性物質の検査を実施する。これまで、測定器で検出できる水準の量に達したことはない。

菊池の夢に、自分の子牛も「いわて遠野牛ブランド」で売れるようになることが加わった。そのつてもできた。

第14章 安全な牛育てていく

畜産農家の菊池昌茂は2年前、牛のセリで牧場主の千葉政奈（ちばまさな）（47）と知り合った。

大手牧場「いわて門崎丑（かんだきうし）牧場」を経営している。岩手県の一関市や奥州市を拠点に、1450頭もの牛を飼う大規模畜産農家だ。

千葉は2012年4月、遠野でも畜産を始めた。遠野で廃業した牧場を借り受け、150頭を飼っている。生まれた子牛を育て、エスフーズ系の「遠野牧場」に納める。「いわて遠野牛」になる。

牧場は100ヘクタール以下の土地にあるが、念のために3カ月かけて周囲をすべて除染した。その除染を、菊池が手伝った。

それをきっかけに、菊池は親しく千葉とつきあうようになった。

千葉は、おからやアルコールかすを再利用した餌の開発にも取り組む。日本独自の栄養豊富な食品であるにもかかわらず、これまで捨てられ、餌は外国産に頼っていた。

菊池は、千葉が多く頭数を飼いながら環境に配慮し、合理的な経営をしているのに感心した。その千葉が、いわて遠野牛に可能性を見いだして遠野に来た。畜産を学ぶチャンスだ――。

菊池は自分の牧場の仕事の合間に千葉の牧場を手伝い、その経営方法を学ぼうとしている。

遠野市は、5年かけて全牧草地を除染すると決めた。

土を掘り返したあとに、改めて牧草の種をまく。その牧草を検査する。放射能が検出されなくても、牧草がしっかりと根を張らず土が軟らかいうちは放牧できない。除染が済んだ放牧地が使えるようになるのは、早くて2年後だ。

しかし、遠野の農家はその結果を心配していない。イトーヨーカ堂から、放射能に関して不安を示されたことが一度もないからだ。

「信頼されていると感じる。だからこそ、自分たちも責任を持って、安全な牛を育てていく」

市は除染の実施をいち早く決め、マイナスになる要素をつぎつぎに取り除く努力を進める。

ヨーカ堂食肉部門責任者の水本忠土はいう。

「農家の皆さんは上流で安全な牛を育てる。私たちは出口でちゃんと測定する。安全さに問題はありません。あとは、どんなおいしい牛が出てくるか楽しみです」

プロメテウスの罠〔21〕 遠野ショック「牧草地を取り戻せ！」

著 者 朝日新聞（山田佳奈）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年1月18日 WEB新書版発行

2013年11月30日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-000-7

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年1月18日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。